

JAUW 茨城支部だより 2016 年度-2 号

URL <http://jauw-ibaraki.net/> 2016 年 8 月 26 日 一般社団法人 大学女性協会(JAUW)茨城支部 発行

暑い夏の熱い政治決戦も東京に初の女性知事を誕生させて終わりました。確実に女性の活躍が期待される時を迎えていると実感します。平和の祭典—オリンピックが、初めて南米で開催され、熱演が繰り広げられています。リオ五輪が終わると後半の静かなスタートです。9月10日には本部事業主催・新規事業委員会主幹のパネルディスカッション、9月25日には、我が茨城支部主催の水戸市の男女平等推進月間市民企画講座があります。理学療法師と笑いヨガの講師を迎え、ストレス解消講座を開催します。会員多数の皆様や友人の皆様のご参加をお待ちしています。



さて、本出版については大好きいばらき地方創生応援事業助成金を戴くことになり、本腰を入れて本年度早期の完成に向けて尽力しているところです。苦心していることは、いかにわかりやすく読まれる本にするかという点です。そこで、朝ドラで話題のトト姉ちゃんの編集長に興味を持ち、文春文庫『花森安治氏の編集室』を買ってきました。「文章は話すように」「八百屋の奥さんにも魚屋さんの奥さんにわかってもらえるように」書き「教えてやろう、というようなニオイのする文章がいちばんイヤラシイ。読者とおなじ目線に立って文章を書け」と書かれてありました。文章のわかりやすさで定評のある『暮らしの手帳』を生んだ秘訣が、そこにあるようです。難しい作業となりますが、話すようにわかりやすくをモットーに、年度内完成を目指していきます。皆様のご協力宜しくお願い申し上げます。

(支部長 M・K)



本出版に向けての編集会議

本編集委員会からの中間報告

茨城支部本出版プロジェクトでは現在 16 回の編集会議を重ねております。少しずつではありますが内容が固まり、本の題名は「YORO I を脱いで…」に決定しました。概要については下記をご覧ください。原稿をお寄せいただいた皆様にはご協力いただきありがとうございました。計画通りは進んでおりませんが、より良い内容の本が制作できるよう編集委員一同頑張っております。

(H・K)

「YORO I を脱いで …」

序章

第Ⅰ章 YORO I をつけて … 支部の活動のあゆみから

第Ⅱ章 YORO I を脱いで … 茨城大学連続出前講座から

第Ⅲ章 トピラを開けて … これから幸せな人生を歩む人へのメッセージ

終章 新しい(しなやかな?) ○○ をまとめて… (鎧を脱いで、これからの方向性)

付章 年表 データ紹介

◎ 序章 YORO I を脱ぐ意味を「詩」のように著す (3つのステージ)

◎ 第Ⅰ章 YORO I をつけて … 支部の活動のあゆみから

第1節 学び続けられて… 戦争を経ても学びを続けられた者の使命

第2節 宝船を探して… 活動の基礎となる経済力の強化

第3節 足並みそろえて… 他団体との連携・つながるという力

第4節 調べてガッテン… 知る喜び、知らせるための武器

第5節 知事室で … 活動見直しのきっかけ

第6節 出前します!!

第7節 どうやって届けますか?

第8節 やっぱり…手渡しでしょう 出版へ

◎ 第Ⅱ章 YORO I を脱いで … 茨城大学連続出前講座から

第1節 思い込みの文化… とらわれに気づく

第2節 「幸せ」な感じて?… 若者との感覚の相違

第3節 恥ずかしいけど脱いでみた 体験を語り継ぐという共有

第4節 重ねた言葉から… 相互理解のための作業

第5節 まるでお芝居のよう… マンガからワークへ

第6節 飛び出せ!!データ YORO I の着替え… データの裏にある生の声を伝えよう

第7節 学びの場から未来へ 学生との座談会… ミニシンポ

第8節 人の世を支える仕組みから 内田先生の講話… 経済と女性の視点

コラム 「幸せ」づくり社会 長谷川先生の講話 (2014~2015年)…各節に適宜挿入

◎ 第Ⅲ章 トピラを開けて … これから幸せな人生を歩む人へのメッセージ

編集作業を通じて「これって大切」と考えられるものや事柄を伝える

◎ 終章 新しい〇〇をまとめて…（鎧を脱いで、これからの方向性）⇔ 序章に対比して

- * 大学女性協会が地域に果たした役割は何だったのか？これからの地域団体としての役割
- * 闘うYORO I（ジェンダーバイアス）を解いて次の段階へ、次世代へのつなぎ方
- * 次にまとうものを探す

◎ 付章 資料、年表など



「YORO I を脱いで…」
に決定！

「県女性団体リーダー等研修・交流会」に参加して

梅雨明けも間近の 7 月 25 日、県内女性団体のメンバー約 110 名が県庁につどった。

前半の研修会では、県警本部交通総務課の方から「人間は意識されない瞬間が必ずあり、運転中でも見過ごしてしまうパターンがある」など、交通安全に関して特に加齢に伴う具体的な注意事項が述べられた。続いて神戸礼子さん（県交通安全母の会連合会会長）の「心の方向を見定めて」と題し、心の持ちようで事故は防げるなどの講演があった。例年の外部講師に代わって今年の構成団体からの講師は、今後に続く試みとして、連盟の活性化にも期待できるのではないかと思った。

後半は県庁食堂へ移動し交流会が持たれた。県知事のあいさつの後、県女性体育連盟による

「いきいき茨城ゆめ国体 2019」イメージダンス発表にともない参加者とともに体を動かす場面もあり、和やかな立食会となったが、他の団体と交流するまでには至らなかった。県内から 39 もの団体やグループが集まったこの機会に、お互いの情報や意見交換などの時間を持てればと感じた。

連盟の研修会には久しぶりの参加だったが、昔の顔ぶれに多く出会い懐かしい思いと同時に、これから活躍を期待される若い方の参加があまり見られなかったのは残念に思った。連盟の発展のためにも、名実ともに今後を担う「リーダーの研修」が求められるのではないだろうか？

（E・M）

女性団体リーダー等
研修会



女性団体リーダー等
交流会

カナダ視察 「赤毛のアン」の原点を巡る旅

「赤毛のアン」のふるさと、プリンスエドワード島 (PEI) はカナダでも東の端。カナダは東に行くほど英語圏からフランス語圏になるというけれど、PEI は英語圏。今でもイギリスとの関係は深く、州都のシャーロットタウンには、副総督が置かれ、その屋敷もあり、見学できた。PEI の広さは愛媛県と同じくらい。主な産業は農業 (酪農)、漁業、観光。「赤毛のアン」に出てくる創作上のアヴォンリーの大部分は、PEI 北部、キャベンディッシュ村。一面ジャガイモ畑とキャノーラ油の原料となる菜の花畑が続く。

日本ではアニメや映画で有名な「赤毛のアン」の原書は「ANNE OF GREEN GABLES」。作家のモンゴメリーはキャベンディッシュ村近くのニューロンドンで生まれ、2歳で実母が亡くなってから父親とオタワで暮らすも、父親の再婚相手と折り合いが悪く、キャベンディッシュ村に戻り、祖父母と暮ら



した。その後の近くの GREEN GABLES という農場で暮らす祖父の従兄妹たちとの交流が、「赤毛のアン」の原点。GREEN GABLES を訪ね、モンゴメリーが名づけた恋人の小径 (Lover's Lane) やお化けの森 (Haunted Wood) を散策したが、アンやマリラやマッシュウが今でも住んでいるような錯覚に囚われる。またモンゴメリーは郵便局で働きながら小説を書いていたため、送った原稿が 5 回もボツになって、原稿を返

されても誰にも知られなかったことが大きく、6 回目にしてようやく小説になったという。それにしても不屈の精神がこの小説を生んだのだと思い知らされる。モンゴメリーは牧師と結婚してオンタリオに住んでからは故郷を訪れる機会は減ったものの、死後は遺言通りキャベンディッシュ村のお墓に埋葬され、私たちが訪れた時も、お花が供えられていた。



訪問した 7 月 17 日から 22 日の時期、学校は夏休み。「赤毛のアン」のミュージカルには子どもたちも親に連れられて大勢見に来ていた。今回の配役はアンもギルバートも PEI 出身で、これは初めてのことだそう。野外では「カナダの歴史」を題材にした無料のミュージカルが演じられていた。カナダは移民の国。民族も多様。野外ミュージカルの主題は「カナダはひとつ」であった。

ところで、PEI では横断歩道でないところを横断しようと道路の縁に立てば、すべての車が止まって、横断するのを待ってくれる。飲酒運転は厳罰。大きな交通事故はないそうである。PEI は豊かな自然と人々が融合しながら、安心・安全な町でもあった。

(Y・M)

新会員自己紹介

R・Kさん*

茨城県日立市出身。男女雇用機会均等法が施行された年に社会人となり、企業に就職しましたが、当時の寿退社という慣習に従い結婚退職しました。結婚しても女性が活躍できる仕事はないかと IBS 茨城放送のレポーターとして県内の情報を発信する仕事をしておりました。夫の仕事の関係で米国に 1 年滞在し、日本と米国の幼児の育成方法の違いを勉強し、帰国後母子を支援する事業を立ち上げました。女性センターでは就業支援講座・啓発支援講座など企画・DV を考える講座などのお手伝いをしております。女性活躍推進法が成立し、女性が自ら幸せな人生をデザインする自由な時代が到来したことをとても嬉しく思います。今後とも宜しくお願い致します。

編集後記

先日「子ども食堂」を訪問した。主催する講座の打ち合わせも兼ねてだが、シングルマザーと子どもたちやスタッフらとともに美味しい夕飯までごちそうになった。フードバンクをはじめ、地元の農家などから提供された食材を使って調理スタッフが献立を工夫する。大家族団欒の温かい雰囲気であるが、ママたち、子どもたちの本音を聴く場でもある。日本の子どもの貧困率が高いことはマスコミ報道などで周知されているように思うが、底辺層の深刻さ（格差）に関するデータはまだあまり知られていない。まずは子どもたちの空腹が満たされなければ学習支援も意味はない。ママたちにとってもワーク・ライフ・バランスどころではない。ニーズに応じた柔軟な支援の必要性を感じた訪問であった。(目出鯛笑子)